

第1回 国際園芸博覧会日本国出展委員会 意見の概要

【2021年ドーハ国際園芸博覧会及び日本国出展計画（案）】

- カタールの映像ではハイドロポニクを強調していた。今回は、ランドスケープのデザインというよりも、デザインを構成する新しい技術に関心が高いのか。
(現地の園芸博事務局から砂漠の緑化やモダンアグリカルチャーも展示してほしいとの要望があったと事務局から説明)
- 技術面で工夫できるとしても、技術を適用できる植物の種類が現地にあるのか、そうでない場合の工夫が必要であり、検疫面を十分に踏まえた上で計画を立てる必要がある。横浜市での国際園芸博に結びつけていくには、横浜市が環境共生都市であること、その分野で日本がリードしていくような新たなプレゼンができるが良い。
- 横浜市にはぜひ頑張ってもらいたいし、2027年の前提として考えていただきたい。
- ロンドン橋 800周年にあたり、橋を立体農場にするというアイデアがコンペで選ばれ、パリでもエコタワーという同様の動きもある。ミラノ万博の時、アメリカ館が立体農場を出していた。これから食糧問題が浮上する中、思い切った屋内・外の展示をしてチャレンジしていかないと話題を集めないのではないか。また、コロナの拡大を背景に、グローバリズムの見直しとブロック化が進むとみられる中、輸出をどうしていくのか、システムとニーズを一体的に戦略的に考えていかないと。従来のミスト付きの壁面緑化の考え方では魅力にならないし、相当な知見をつぎ込んだ新たなチャレンジが必要であり、検討してほしい。
- SDGsの流れの中で、カタールにおいてSDGsのゴールと博覧会の主張がどうつながっていくか、関連性を追っていく必要がある。加えて、北京国際園芸博覧会で2025年の大阪万博のプレゼンテーションが行われた。大阪万博の話も入れながら、経済界の方をより多く巻き込みながら、園芸・緑の価値をもっとわかって頂く活動も必要では。
- ハイドロポニクについて、つくばの科学万博でのトマト以降、日本国内ではそれほど広がらず、30年振りに植物工場の動きがある。日本ではコストの問題が大きく、まだ大きな波になっていないが、今後砂漠や宇宙での必要性が高まる中、その分野では日本はノウハウを持っている。花だけでなく野菜も含めた農業技術をやってもらいたい。
- 屋内出展について、今までと同じ方針で良いのか。中東での花の生産はイスラエルぐらいで、日本の花は中東方面に売り込んでいない。調査していないため、これを機会に探るやり方もある。15年程前から、ドバイがアフリカからの花を全世界に撒く中継基地になった。中継基地だけなのか、中東で消費が伸びるのか。現在は日本にはアフリカの花が入ってくる状況だが、日本の良い花を持っていく場になれば良い。
- 横浜花博の里山のイメージと、彼らの持っているサステイナブルの考え方・環境のイメージが違う。日本人の価値観が国際的にどうアピールできるのか、工夫が必要。砂漠でのコントロールできる環境下での農業、緑化等の技術を日本は持っている。植物の育種

面でも、日本の技術力をアピールできる。花の輸出入に関して、中東地域は中継貿易でもあり、かなりの消費も期待できる。

- ドバイで日本の盆栽・花のPRをしたが、現地では建物の中で可愛がっていた。日本の技術を持ち込み、何かできないか。
- ドーハに日本が何を残していくのか、横浜のテーマを煮詰めていく中で、食料等の問題等も含めて関わっていくか。ドーハにおいて横浜を煮詰めていくチャンスでは。
- 現在、岐阜でモロッコ庭園をつくっており、文明に対する考え方が違う中で感じる事として、アラブ世界でのエデン観は、プールがあり、果物、椰子、多くの動物がいるというものであるが、アジアのモンスーンとも共通している可能性があり、そのような情緒的なところで攻めるか、技術的に攻めるか、両方相まって進めるか考えていきたい。

【2022年アルメーレ国際園芸博覧会（フロリアード2022）及び日本国出展計画（案）】

- SDGs に対する取り組みを、どうやって見せていくのか。日本は取り組みが遅れていると指摘される。
- 日本はまだ入口の段階であり、まだゴールに至っていない。横浜市は SDGs 未来都市だが、ゴールをどうとらえているか、横浜国際園芸博覧会をゴールにするのか。
- SDGs は、我がこととして具体的に取り組んでいくということ。もう一点、以前、ハールレマミア園芸博覧会の直後に、ロストック園芸博覧会へ庭園の一部を移設した。今回、（開催時期が）近いのだから、連続でできることがあるのではないか。
- オランダは、国全体でのエコネットワーク、グリーンインフラを率先してやっている環境政策の先進都市で、園芸の面でも日本と拮抗する国。オランダが今やろうとしていることは、土の力と、さらに施設の力の両方の活用を考えている。
- カタールとの共通点はどちらも砂質土壌。カタールと同じように技術で攻めるのではなく、思想で攻めていくのが良いのでは。三富新田は、水が無い前提で、1/3 が雑木林、1/3 を畑、1/3 を屋敷林兼雑木林にして、全てが再生循環の形をとって、他に環境圧をかけずにまわしてきた。川口は江戸の大火を踏まえた地域づくりをしてきた。このように、日本では、ランドスケープをつくりながら適応戦略としての土地利用をやってきたことが表現できると良い。